

# 九州・雪遇

王姑娘 著

山田 俊訳

八松は穩やかな土地だ。

いつも雪が降っているからだろう。粉砂糖のような細雪、鶯鳥の羽毛のような牡丹雪、冬になると止むことがない。雪が降り続くほど寒いこの街がどうして穩やかと感じるのか、彼女にもわからない。雪がとても軽やかに掌に降るからだろうか、それが音もなく融けるからだろうか、いつも雪が降った後は、八松全体が点心店の蒸し上がったばかりの白糕（はくこう、米粉で作った蒸しパン）のように、真つ白で柔らかく、そのふわふわとした姿が陽光の下で静かに輝いているからだろうか。

彼女は光を感じることができず、白糕の比喻も自分で思いついたものではない。でも、どんな事でもあの人の口から語られると、いつも安らぎと信頼を感じる。自分が意識を取り戻した時、あの人は告げた、自分達は愛し合う夫婦で、いつもあちこち出かけ、とても

幸せな日々を過ごしてきたのだよ。でも、晋北の路上で匪賊に出くわし、騒動の中、君は頭に傷を負い、目の光と記憶を失ったのだ、と。

盲目となった事実を彼女はとても落ち着いて受け入れた。それは、すでに長く暗闇の世界を過ごしてきたかのようにだった。でも、記憶を失ったことには少しばかり茫然とした。けれど、目の前のこの人を彼女は心の底から愛おしく思い信じていたから、少しも恐れることはなかった。

「あなた、お名前は？」

「影辰風だよ」

「じゃあ、私は？」

「君は雪遇だ。私達が出会った日は、すごい大雪だったんだ」

彼の声は静かで穩やかで、細く流れる泉のようだった。

二

二人が出会ったその日は、好く晴れた春の日だった。そよ風が吹き、草葉はそよそよと音を立てていた。彼が丘を突き抜けると、一面に広がる静かな村が視界に飛び込んできた。

「小魚、小魚、お前は小魚なんかじゃないぞ、お前は

小蝦だシャオシア」、子供達が騒ぎながら彼の前を走り過ぎて行った。

近くで娘の澄んだ声が聞こえた、「もう一度言つてごらん！」

「小蝦、小蝦、目の見えない子は小蝦だ。はっはっはっ」子供達はアツカンベーをして、しきりにはやし立てる。

近づいてくる瘦せた少女が彼の目に映った。裸足で、裾を高々と持ち上げ、艶やかなふくらはぎは飛ぶように軽やかだ。時々立ちどまっては首を傾かしげて何かを確かめている。彼のそばを走り過ぎる時、彼には淡い草花の香がした。

だが、少女はすぐにつまずき倒れてしまった。騒ぎ立てる声の中、彼女は身動き一つせず、草原に倒れたままだ。驚いた彼は慌てて近づき心配して声をかけたが、少女が黒い大きな瞳を見開いてぼんやりとしているだけなのに気付いた。

「よその人？だいじょうぶよ、走り疲れただけ、ちょっと休んでいたの」

彼が見た彼女の瞳にはわずかな輝きもなかった。

小魚という少女にとって、その日は本当に好い日だった。追いかけられているうちに転んでしまったけど、誰かがすぐに痛くはないかと声をかけてくれた。

その声はとても心地よく、小さな刷毛でそつと自分の胸を撫でているようで、そのくすぐったさに、彼女は思わず顔を赤らめた。彼女はこの声が気に入り、声の主も好きになった。何よりも嬉しかったのが、彼が新しく来た学び舎やの先生で、多くの土地を巡り、たくさんさんの事を知っていると、村長が自分達に語ったことだ。

「えへん、えへん。これからは先生を敬い、先生の話をよく聞くように」

「先生、墟神きよしんと荒神こうしんは本当にいるの？」

「先生、河絡からくはあんなに背が低くて、醜いわよね？」

「先生、私は空を飛びたいな。羽人うじんと同じように空を飛べる秘術はあるの？」

彼は笑いながら小魚の果てることのない問いに答えた。彼女は小さい頃からこの村で育ち、すべての路をよく知っている。そのため授業が終わるといつも彼の家まで走って来ては、まわりついて質問攻めにするのだ。

年老いた村長はプカプカとタバコをふかすと、彼に「小魚は可愛そうな子なんじゃ。もともとは目が見えていたんだ、みずみずしい瞳じゃったよ。だが、五歳の時に家が火事に遭い、彼女の父親は彼女を助け出すと、母親を助けに戻り、結局二人とも助からなかった

んじゃ。その日から彼女の目は見えなくなつた。医者  
の話では、彼女は物を見たくないんだそうじゃ。先生  
よ、小魚はあんたのことを好いとる、気にかけてやつ  
てくれんかの」

彼はこの活発な少女を気の毒に思い、また好ましく  
も思い、とりわけ彼女を気にかけるようにした。

当時、腕も足も細かつた十二歳の小魚には、新しく  
来た先生以外に怖いものはなかつた。

### 三

雪遇シユエユが住んでいる所は八松ヤシロの最北にあつた。賑わ  
う街の中心から遠く離れていて、訪れる人もなく、静  
かで落ち着いていた。

雪遇の毎日の生活はとても単純だ。彼女は目は見え  
ないが、竹かごを編むのは玄人はだしだ。昼間は竹ひ  
ごの網目をなでながら、指は目まぐるしく動き、竹か  
ご、竹のごぎ、竹製のウサギなどはすぐに出来上がつ  
た。一定量出来上がると、影辰風インチエンフエがそれを市へ持つ  
て行つて売りさばいた。庭でアンゴラウサギを育てる  
のも彼女の仕事だ。彼女はウサギの長い耳を持ち上げ  
るたびに、何やら慣れ親しんだ感触がした。まるで以  
前も毛が生えていて長くて柔らかい両耳の小動物を育  
てたことがあるかのようにだつた。

夜に影辰風が仕事を終えて帰宅すると、二人は灯り  
の下で夕餈ウツゲを取り、あれこれと話を花を咲かせた。だ  
が、この日は少し違つていた。通りすがりの旅人が戸  
を叩いたからだ。その女の声は疲れ切つていた。見知  
らぬ人と一緒にいるのに不慣れた雪遇だったが、一晚  
の宿を求めた彼女を受け入れた。

夜になり、あたりは一層静まりかえり、三人は灯り  
の下に腰を下ろすと、気の向くままに語り合い、雪遇  
の不安も少しずつ消えて行つた。

部屋の炭盆がパシツと音を立て、女の顔は暖かさの  
せいで少しずつ上気してきた。彼女の視線が二人の顔  
を眺めると、徐々に意味深長な笑みを見せ始めた。

「お二人のような夫婦がいらつしやるとはね」

影辰風の目が急に冷たくなり、女に警告の視線を  
送つた。

雪遇も再び落ち着かなくなつてきた。彼女はやはり  
見知らぬ人がいるのには慣れない。こうしていると、  
何か大切な物を失いそうな気がした。

### 四

ある日、彼は小魚シユエユにある物語を語つた。男と女の愛  
情物語といつたところだ。話し終えると、小魚は暫く  
何も言わなかつた。彼が振り向くと、彼女はぼんやり

と窓の外を眺めていた。

本当に美しいな、この物語は。彼女は手で顎を支えると、心から感動した。そして振り返ると、悪戯いたずらっぽく笑い、尋ねた「先生、誰かを愛したことはある？」彼は少し狼狽うろたえた。彼等のような者たちが、どうして人を愛することができようか。しかも、彼等を愛そうとする者もないのだ。

とうとう答えを聞けなかった小魚は何かを悟ったようだ。彼女の笑顔は消え、最も厳肅な口調で「先生はこんな素敵で、声も好いし、ご飯を作るのも上手、何でも知っている、きつと誰かが愛してくれるわよ」彼は目の前の少女を見つめた。顔の細かい産毛うぶげが星灯りの下でかすかに輝き、思わず手を伸ばして触れたくなった。

この時になって彼はふいに気付いたのかもしれない。年月の流れは早く、あの痩せっぽちの少女は、いつのまにか美しい女性になっていた。彼は気付けば一つの場所に四年間も留まっていたのだ。

彼は思わず長いため息をつくとき、ふざけた口調で言った、小魚、大きくなったら、先生のお嫁さんになるかい？

小魚は少し驚き、顔を急に赤らめると、何気ないふりをして額にかかる前髪をいじり、かすかに何かつぶ

やいた。彼は一瞬戸惑ったのち、彼女が、もう大きくなった、と言ったのだとわかった。

今度は彼が長く黙り込んでしまった。

期待していた答えが得られず、その黒い瞳から涙があふれ始めた。小魚はあわてて俯き、喉を詰まらせながら尋ねた、先生、私の目が見えないのが嫌い？

彼は口を開いたものの、何と云うべきかわからなかった。

彼は目の前の少女に告げるのが忍びなかった。彼のその生涯で、人の世の無数の悲喜離合を見て来た。どんなに強い情熱もゆつくりとした時の流れに抗することはできない。最後まで一緒にいることができないなら、始めないほうがよい。あたら苦しみを増すだけだ。まして、彼がその身分を明らかにすれば、彼女はきつと遠く避けていくだろう。

だが、小魚は喉を詰まらせながら彼に言った、私は先生と一緒にいたい。

少女の柔らかい吐息が彼の顔にかかった。彼はこの時をはじめ唇の柔らかさと涙の苦さを知った。

## 五

雪遇シユユウは最近よく夢を見る。夢の中、いつも小魚シニアオユウという名の少女と出会い、雪遇は小魚の生涯を体験し、

彼女の喜怒哀楽を感じる。

男がとうとう小魚を連れて行くことに同意した時、彼女は夢の中で涙を流して喜んだほどだ。

小魚、君は見たくはないのかい？十二主星がどんな色をしているのか知りたくないのかい？雪桐と青鸞を見たくはないか？河絡と夸父を見たくはないか？私は君をいろんな場所に連れて行くことができる、君は見たくはないのかい？

彼女の夢の中の男はこの上なく優しい声でそう尋ねた。

夢の中の小魚は懸命に頷き、見たいわ、全部見たいわ。あなたの顔が私が思っているのと同じかどうかも見たいわ。

夢の中の全てこそが真実で、雪遇は目覚めると、いつも一瞬恍惚とする。自分はどこにいるのだろう。

彼女は時折、自分と小魚の関係を考えた。いったい、彼女が夢の中で小魚になったのか、それとも彼女が小魚の夢なのか？

## 六

小魚の目が見えるようになると、彼が最初に彼女に贈ったのは毛がふさふさした耳鼠だった。

小さな耳鼠は少しも怖がることなく、小魚の肩先に

親しげにうづくまり、時々大きな両耳を羽ばたいてそよ風の中を飛ぶと、また小魚の身体に戻って来た。

二人はやがて小魚の暖かな故郷を離れ、青い石の神秘的な甜水井を眺め、通平特産の果実の飲み物を飲みながら、ゆっくりと北上して行った。

南淮では彼等は運がよく、紫梁大街の秋玫瑰が満開だった。ちようど霜が降る時期だったので、二人は船を借りて河を下り、南淮城の名士達と九州全土にその名を覇す「十里霜紅」を愛でた。

その夜は月の色すら霜のように冷たく河に映じていた。細かい銀色の光がさざ波に沿って弧を描きながら広がっていた。

小魚は淡い黄金色に輝く彼の長い髪を見ながら、この人が最初自分を拒絶した理由が分かったように思えた。

「あなたは羽人で、私が寿命が短い人族だからなのね、私達が最後まで一緒にいることができないのを気にしたのでしょ？」

酔って少しトロンとした彼女の瞳を見ながら、彼は微笑んで何も言わなかった。

「でも、それはとても好いのよ、好いのよ」小魚はヒクツと言うと、その目は少しうつとりしていた。

「知っている？私は以前は死ぬのがとても怖かった

の。私が死んでも誰も涙を流さないことが分かっていたからよ。村人は私なんか覚えていないわ。この世界で誰一人覚えてなんかいないのよ。随分たつてから、みんな思い出すのよ、あれ？あの目の見えない子はとうしたんだ。そしてふいに気づくんだわ、あゝ、彼女は死んだんだっけ。死んで何年もたつんだ、何年も」

月光の下、少女の顔を涙が静かにつたつた。

「でも、好いのよ。あなたがいれば、好いのよ。あなたは私を覚えていて。私が死んで、あなたは羽人の女性と一緒にたつても、ずっと私のことを覚えていて」

その後の長い年月の中で、この夜の霜のような夜色と少女の顔をつたつた涙を彼はずっと覚えていた。彼女は彼に言ったのだ、私が死んでも、ずっと私のことを覚えていて。

あの時、彼にも話したいことはたくさんあった。だが、それが口をついて出ることはなかった。

## 七

女は心配が急に冷たくなったのを感じた、だが、我慢できず口を開いた。

「私は本当に羨ましい、あなた達が羨ましいわ」彼女は雪遇シュエツクの方を見ると、暖かい笑みを浮かべ、「あなたはどうかやってご主人を受け入れたの？私とあなたのご

主人は、私達のような者は、九州の大地を常に彷徨いさまよ、人々に溶け込もうと努力しても、常に異類としてのけ者にされているのよ」

雪遇はわけが分からず思った、どういうこと？「あなた達のような者？」私がどうして受け入れることができるかと言ふの？

「彼はとても好いわ。彼の声は素敵だし、ご飯を作るのもとても上手、たぐさんの事を知っているし、私にはとても優しいもの」

影辰インチエンフオン風の体はふい震え、卓上に置かれた雪遇の手をしっかりと握つた。彼は不愉快そうに「客人、私たちは何年も一緒に暮らしているんだ、言葉ではつきりと説明できないことだつてあるんだ」

女は彼の緊張した顔を見て何か理解した、「あつ、そうだったの。彼女はまだ知らないのね」女はつぶやくと、その声はふいに鋭く高くなった。

「どうして彼女に告げないの？こんな田舎の静かな所に住んで、誰も来ないから一生ごまかせると思っているの？彼女はいざれ知ることになるわよ！その時が来れば彼女は間違いなくあなたから離れていくわ！あなた、私、私達、どれだけ学んだところで、最後はたった一人で一生を彷徨さまようことになるのよ！」

「ギョー」雪遇が突如椅子を押しつけて立ち上がる

と、彼女の顔は激怒で真っ赤に膨れ上がっていた、「あなたに何がわかるのよ！私はずっと辰風のそばにいるのよ、彼が人族だろうとなかろうと関係ないわ！」

## 八

どうしてなの。どうしてあなたは歳をとらないの？羽人だって歳をとるはずだわ。

でも、どうして、一年、二年、五年、十年、あなたは私が初めてあなたを見た時のままだわ。金色の髪は相変わらず目にまぶしく、瞳は今でも輝き、笑顔もとても、とても優しいわ。

私達が育てたあの小さな耳鼠もとくに去年の冬に死んでしまったのに、あなただけはどうして少しも変わらないの？

周りの人たちがどんな目で私達を見ているのか知っている？

私も気にしないようにしているわ。

でも、歳をとらないあなたが、少しずつ老いていく私を愛し続けられるの？

あなたの命はいつたいどれだけ長いの？私達には一人の子供すらいないわ。私が死んだら、あなたは本当に私を覚えているの？

いえ、私達にはどうして子供がいないの？

あなたはいつたい何者なの？  
あなたはいつたい何者なの？

## 九

空がわずかに明るくなった時、女は去っていった。

外の真っ白な世界に向かい、女はしばらく呆然としていた。「ごめんなさい」彼女は苦笑し、「嫉妬してただけよ。もう何年も本当に私を受け入れようとした人がいかなかったから。疲れ果ててしまったの」

影辰風は黙って女が残した足跡を見ていた。それは真っ白く広がる雪の大地の上を独りぼっちで遠くまで続いていた。

彼が部屋に戻ると、炭盆の炭が暖かく燃えていて、雪シユエユク遇はすやすやと寝台で寝ていた。相変わらず魅力的な頬は真っ赤にほてっていた。彼は思わずかがみこむと、わずかに開いたその唇に口づけした。とても柔らかく、記憶の中の昔と変わらなかった。

苦しかったあの日々を彼は思い出した。その時、二人はずでに何年も一緒に過ごしていたが、彼女はとうとう彼が羽人に凝集した魅であることに気づいてしまったのだ。

「あなたはどうして歳をとらないの？」

「歳をとらないあなたが、少しずつ老いていく私を愛

し続けられるの？」

「永遠の命を持つあなたがずっと私を覚えていられるの？」

「魅に愛が本当にわかるの？」

真実を知った彼女は何のためらいもなく彼から離れていくだろうと、彼は思っていた。誰かが彼が異類だと告げたのだ。だが思いがけないことに、彼女はそのまま彼の元に留まった。彼を愛するがゆえに彼女はヒステリックになり、ひとけ人気の多い場所を避けるようになった、人々の異様な視線を恐れたからだ。鏡を見ることができなかった、たとえわずかでも、年月が過ぎた痕を見るのが恐ろしかったからだ。

シテオユウ小魚、山賊と遭遇したあの日、君はどうして逃げなかったんだ。悲惨な死に方をすればするほど、私が長く君を覚えていられると思っただろうか。

だが、君を死なせるわけにはいかなかった。君は言ったね、死んだ後、誰も君を覚えていないと。でも君は考えたことがあるかい、私も怖いんだ。

私はただの魅だ。星々の間を吹く風でしかなく、全ての種族から異類と見られているのだ。生きている時は我々を受け入れる人はほとんどいない。消えてしまふと、過ぎ去った風を覚えていられる人など誰もいないのさ。

だから、私達は生き続けなければならぬ。一緒に生きて、君が私を覚えていれば、私も君を忘れることはないだろう。

あの日から、君の眼は見えなくなった。医者にはシヨックが大きすぎたのだと言った。私には君が見たくないだけなのだわかってる。

君は知っているかい。実は私は少し喜んでいるんだ。私は秘術で君の記憶を封印したんだ。こうすれば、私達はあの苦しかった記憶を忘れることができ、新しく始めることができる。

今でも私は覚えているよ、あの日は、けいりょう擎梁山脈の麓にいて、晋北は冬に入ったばかりで、初めて雪が降った日だった。

## 十

医者と言った、シテオユウ小魚に残された時間は長くないと。あの日受けた傷が心をあまりに傷つけ、回復できないからだ。

だがこの時は、イン・チエンフオン影辰風はもはや恐れていなかった。若い頃に重傷を負っていたせいで、彼は残された日々で、その精神力を無理に使うことはできなかった。だが、それでも彼は強引に秘術で小魚の記憶を封じ込めた。そのため、この数年、彼は常に苦痛にさい

なまれていた。

この頃、彼は自分がいくらか衰弱して来たと感じている。だから、彼女の記憶が漏れ出すにしろ、封印が解けるにしろ、そう遠くはないだろう。

影辰風は小魚の傍らに横になった。その時、彼は、二人が初めて出会った時の草花の香りを再び嗅いだよ  
うな気がした。

いいんだ。彼は思った、今度は二人は誰も恐れる必要はなくなったんだ、二人はすぐに墟荒の中で再会し、そして永遠に一緒になるのだ。

小魚、知っているかい？私達が再会する日、空いっぱい  
に雪が降っているはずだ。

【解説（ネタバレを含みます）】

本篇は王姑娘「九州・雪遇」（『九州幻想・美人酔』所収。新世界出版社、二〇一一年）の翻訳である。

「九州系」に登場する「人・羽・夸父・河絡・鮫人・魅」の六種族の内、「魅」族のみが肉体を持たない精神的存在とされている。そのため、他の種族を模倣して外界の物質を吸収することで自身の身体を作り上げて社会に溶け込もうとする。これを「凝聚」と言う。肉体を凝聚した「魅」は強大な精神力を備え、

秘術師としての天賦の才を備える。また、人族に「凝聚」した「魅」は絶世の美男美女になるとされている。

『九州・海上牧雲記』の主人公の一人・牧雲笙は魅族の母と人族皇帝との間に生まれたが、ドラマ版『九州・海上牧雲記』（二〇一七年）で母親役を演じたのは張鈞甯だった（息をのむ美しさ！）。

作中に二度見られる「墟荒」だが、この世界は最初、混沌とした一つの物質だった。そこに一つの精神体が生まれた。それが「墟」と称される精神的神である。これに対して、物質的神が「荒」である。そして、「墟」と「荒」が衝突し、「荒」が砕け散ることで万物が誕生した。末段の影辰風の語りは、「墟・荒」未分の根源、全てが混然一体となった根源へ戻ることを意味し、ここでは影辰風と小魚の別もなく、精神と肉体の別もなく、夢と現実の違いもない。

「昔者、莊周、夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。……知らず、周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか」（『莊子』「齊物論篇」）